

# 漆芸美術館だより



嘉手納並裕《黒漆山水文堆錦総張文庫》1984年頃(沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵)

# 87

展覧会紹介:沖縄県立芸術大学共催 「沖縄の工芸 — 人間国宝と現代作家たち —」

展覧会紹介:「第25回 飛翔する輪島の漆芸作家たち — 全国展入選作品 —」

漆の小箱27:谷崎潤一郎 文学と漆

輪島漆芸美術館友の会「夏季見学会」実施報告

2019年度第1回漆文化セミナー実施報告 他

2019年9月9日発行

# 沖縄県立芸術大学共催「沖縄の工芸―人間国宝と現代作家たち―」

会期 9月13日(金)～11月11日(月) \*会期中無休

本展覧会は「沖縄文化が造りあげてきた個性の美と人類普遍の美を追究すること」を建学の理念として掲げる沖縄県立芸術大学と連携し、沖縄の工芸の伝統と現在を紹介する初めての試みです。かつては海上交通の中継地として、中国や日本、朝鮮、東南アジアから様々な文物や人がもたらされ、沖縄の文化はその美しい風土をゆりかごに独自の発展を遂げました。工芸の分野においてはその特徴が色濃く、幅広い分野において継承されました。同大学付属図書・芸術資料館所蔵品からその一例をご紹介します。

《経緯緋芭蕉》(写真上)は芭蕉布の重要無形文化財保持者、平良敏子(たいらとしこ)による作です。緋はインドが起源とされ、東南アジアを経由して沖縄に伝えられました。沖縄の緋は直線と幾何学文で構成された意匠が特徴です。芭蕉布は首里王府の御用布として、また庶民の衣生活に欠かせないものとして、17世紀には琉球全土で織られていました。3年間育てた糸芭蕉の原木から繊維をとり、「糸積み」「燃り掛け」など手作業による多くの時間を費やし、琉球藍や相思樹などの天然染料で染色されます。素朴な風合いの糸がおりなす清々しいリズムに、洗練された芸術性がうかがえます。沖縄の陶芸は荒焼(アラヤキ)と呼ばれる無釉陶器、上焼(ジョウヤキ)と呼ばれる施釉陶器に大別されます。17世紀に琉球における本格的な窯業生産を開始した湧田・知花・宝口の窯は、1682年の行財政改革の一環で那覇市内の壺屋に統合されました。庶民が用いる実用品にとどまらず、王家や上級士族層もその生活



平良敏子《経緯緋芭蕉》1986年

や儀礼に使用するなど、壺屋では幅広い社会的階層を対象に、多様な焼物が生産されました。《線彫魚海老紋花瓶》(写真下)に見られる魚文は、斬新な図案で人気を博し明治維新後の廃業の危機を救った琉球古典焼のもの通底します。金城次郎は壺屋から読谷村に移って登窯を築き、重要無形文化財保持者「琉球陶器」保持者として活躍しました。14～15世紀に中国から技術が伝わったとされる漆芸もまた、独自の系譜が脈々と受け継がれています。中国への朝貢品や島津家や徳川將軍家への進上品をはじめ、「貝摺奉行所」が漆器全般の製造管理を行っていたことは有名です。沈金、螺鈿、箔絵、堆錦、密陀絵などの特徴ある装飾技法を現在に伝えていきます。



金城次郎《線彫魚海老紋花瓶》20世紀  
いずれも沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵

《黒漆山水文堆錦総張文庫》(表紙)はキリを素地とした合口造りです。蓋甲面に鳥、楼閣、舟と松梅香る山水を、側面には梅、デイゴ花木、岩や舟を色鮮やかな堆錦で描いています。作者の嘉手納並裕(なへいゆう)は第二次世界大戦で焼失した「ヌイムンマチ(塗物町)」・若狭町に生まれ、復員後漆器店を再開し現在に続く「角萬漆器」の創業者となりました。

本展覧会では、沖縄県立芸術大学関係者による近作も同時に展示いたします。日本を代表する漆器産地である輪島において沖縄の工芸を紹介することは、相互のエネルギーをより高い次元に昇華させるまたとない機会となります。どうぞ会場へお運びください。(寺尾藍子)

# 第25回 飛翔する輪島の漆芸作家たち ― 全国展入選作品 ―

会期 11月16日(土)～2020年1月19日(日) \*年末休館 12月29日(日)～31日(火)

輪島の現代漆芸作家たちの全国公募展での活躍に焦点を当ててご紹介する本展覧会はこのたび25周年を迎えました。

輪島には人間国宝をはじめ、重鎮から気鋭の若手まで幅広い世代の漆芸作家たちが活躍しています。現代漆芸作家がこれだけ多く集まる地域は全国的に見ても珍しく、漆芸に触れるうえで大変恵まれた環境であるといえます。

今回は過去3年間の全国主要公募展に特別出品や入選を果たした作家の作品を、会派を越えて一堂に展示します。始めに第I部の作品から2点をご紹介します。

改組 新第5回日展で特選を受賞した田中貴司氏の《望郷》(写真上)は異国からやってきた船と人物、犬を描いて望郷の思いを表現しています。華麗な衣装を身に纏い、煙管を持つ南蛮人の目元には涙が螺鈿で描かれています。色乾漆粉と彩漆を使い、細やかな螺鈿をアクセントに研出技法を駆使し、黒とグレーの色面が人物を際立たせる効果を生み出しています。南蛮屏風を彷彿させる構図で、空間を効果的に使用しています。

鬼平慶司氏の《蒔絵十二稜箱「憧憬」》(写真下)は切金や螺鈿、蒔絵の技法を随所に施し、作者がカナダで見た鮮やかなオーロラの輝きを表現しています。高蒔絵の技法で放射線状に漆を薄く盛り上げ、粉を蒔いた後に透明感のある緑彩漆を塗り込み、揺れる光のカーテンを表しています。箱の内、身の立ち上がり部分には、荒涼とした厳しい大地に広がる北

限の森や星空が描かれています。抒情的な光景への憧れが感じられる作です。

第II部では帝展で特選を受賞した前大峰や竹園自耕など、昭和初期に全国公募展で活躍した輪島の漆芸作家たちの優品をご紹介します。

当地における現代漆芸作家たちの活躍は、全国公募展に出品し礎を築いた先人たちの多大な功績があったからです。作品を通して、先人たちの功績を

振り返る機会となれば幸いです。

なお、展覧会会期中の11月17日(日)13時30分から出品作家の浦出勝彦氏、坂本康則氏を講師にお迎えし、「ギャラリートーク」を開催します。展示作品の解説とともに作者両名の制作に対する想いなどを知ることが出来る貴重な機会となっております。皆さまのご参加をお待ちしています。  
(山内亜沙美)



田中貴司《望郷》2018年 改組 新 第5回日展【特選】



鬼平慶司《蒔絵十二稜箱「憧憬」》2018年 第65回日本伝統工芸展

## 谷崎潤一郎 文学と漆

まだ電灯が普及していなかった頃の日本の美について記した随筆「陰翳礼賛」(1933年)の中で、谷崎潤一郎(1886~1965)が漆器を賛美していることは有名です。薄暗い灯りの下で見る蒔絵の輝き、漆器の柔らかな手触り、温かい汁の入った吸い物椀から微かに聞こえる音や、お椀を持った時の重みの感覚や温もりなど、五感を通して感じられる漆器の魅力が、陶器との比較を通して余すところなく描き出されています。

しかし、谷崎が漆器の魅力だけではなく、漆掻きの方法についても文章を遺していることは、あまり知られていないのではないのでしょうか。伝聞形式の短編小説「紀伊ノ國ノ狐ノ憑漆掻キニ語」(1931年)では、漆掻きを生業とする丑次郎が狐に化かされた顛末が、同じ村(高野山の南三里ばかりの山奥)に住む「私」によって語られます。物語の冒頭では漆掻きの様子が詳しく説明されており、谷崎の漆に対する造詣の深さを感じさせます。少し長くなりますが、引用してみましょう。

「漆掻きと云ったって都会の人は御存知ないかも知れませんが、山の中へ這入って行って漆の樹からうるしの汁をしぼるんです。いいえ、なかなか、百姓の片手間ではありません。ちゃんとしてそれを専門にする者があつたんで、近頃はめったに見かけませんけれども、外国の安い漆が輸入されるようになったそうですから、いま

どきあんなことをしても手間ばかりかかって引き合わないんですよ。兎に角以前には私の村なんかへもよく漆かきが奈良あたりからやって来たもんです。漆鉋と云って、鎌のようなもので先の曲った奴を持って、腰に三四合ぐらい這入る竹の筒を提げて、漆を見つけると、その鉋で皮へ傷をつける。それがあんなまり深く傷をつけ過ぎていけないし、浅過ぎてはいけないし、呼吸物なんで、その傷口から松脂まつやにのようにどろりと滲み出て来る汁を篋くらですくって竹の筒へ入れる。そんな時にうっかり下手なことをやると汁が顔へはねかかったりすると、それこそ赤く脹れ上りますから、馴れた者でないと出来ない仕事なんですよ。漆にカブレないように紺の手甲を着けて、すっかり紺装束で出掛ける。まあそんなことをする人間なんで、私の村にもその商売の者が一人住んでいましたね。此の男は遠くへ出稼ぎをするのでなく、村の近所の山へ這入ってはうるしを採ってくらしていました

「谷崎潤一郎全集 第二十巻」中央公論社、1958年(新字新仮名づかいに変更しています)

国産漆が外国産の安価な漆に取って代わられつつある状況から漆の採取方法や漆掻き職人の装束まで、とても詳しく書かれています。また、漆掻きの男

が「遠くへ出稼ぎをするのでなく、村の近所の山へ這入ってはうるしを採ってくらして」いたという描写は、丑次郎が村周辺の山に詳しいことの伏線にもなっており、男を化かそうとして山の中を連れまわそうとする狐と、ぼんやりとした意識の中で自分のいる場所を把握して難を逃がれようとする男とのやりとりを生かされています。山を舞台とした作品には、山に詳しいであろう漆掻き職人を主人公にするのが適役だと思われたのかもしれませんが。丑次郎はどうなったのか、「私」がこの物語でどのような役割を果たしているのかは、ぜひ作品でご確認ください。

ここまで、谷崎作品に描かれた漆器や漆掻きについての描写を見ましたが、実は文章だけではなく、書物そのものにも漆への愛着を見ることが出来ます。1933年に刊行された『春琴抄』の特装本(創元社刊)は谷崎のこだわりによる漆塗りの装丁で、朱漆塗と黒漆塗による二種類があり本文は変体仮名という独創的なものでした。赤と黒の装丁は主人公である春琴と佐助を思わせ、物語を読了された方には二種類の仕様で刊行されたことが首肯されるものとなっています。谷崎文学と漆との奥深い関りを、『春琴抄』の装丁からも感じる事ができるのです。

(河原法子)



TOPIC 1

# 輪島漆芸美術館友の会 「夏季見学会」実施報告



7月5日(金) 参加者35名

- ◆ 富山県水墨美術館(富山市五福)
- ◆ 雲龍山勝興寺(高岡市伏木国府)

◆ 高岡市万葉歴史館(高岡市伏木一宮)

水墨画など日本文化の美を伝える富山県水墨美術館と、「万葉集」の代表的歌人・大伴家持ゆかりの雲龍山勝興寺、高岡市万葉歴史館を巡りました。たくさんのご参加、ありがとうございました。



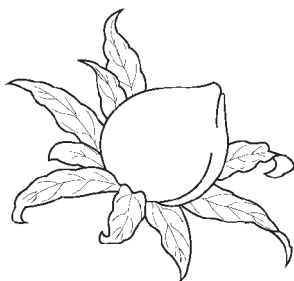
TOPIC 2

# 2019年度 第1回 漆文化セミナー実施報告

7月20日(土)に行われた当館文化講座漆文化セミナーでは、京都工芸繊維大学教授の並木誠士氏をお招きし、「工芸品にみる日本の伝統文様」をテーマにお話いただきました。

文様とは器物の表面に施された装飾であり、原則として形を持たないものであるとしたり、原則として形を持たないものであるとしても解きました。日本の工芸品に見ることのできる文様は、他のどの地域とも異なる独自性を持ち、魅力的です。平安時代の末期以降、中国の様式からの脱却とともに非対称性、偶然性、散らし、絵画性などの特徴が生み出され、その極致といえる文学意匠の流行に至るまで、豊富な写真資料とともにご紹介いただきました。また、西洋に学んだ新しい時代の芸術に対応するために行われた、近代の図案教育や図案集の出版など、現在におけるデザインとの礎となる取組みを目の当たりにすることができました。

参加者からは、「大変わかりやすく、これから違った視点で見ることができそう」「文様を軸に幅広いお話が聞けて大変満足です」など、知識を深め充実の時間を



過ごせた旨の感想を多くいただきました。工芸品を鑑賞する際には、その装飾の何が日本的なのか、探しながら眺めることも楽しみの一つとなるでしょう。次回以降のセミナーもぜひご期待ください。  
(寺尾藍子)



## イベント情報 2019年9-11月

\*予定は予告なく変更することがあります。詳しくはホームページをご覧ください。

### 満65歳以上の輪島市民 入館料無料

期日 9月14日(土)～23日(月・祝)

### アート&ポエムコンクール2019作品展

会期 9月27日(金)～10月6日(日)

### 体験型講座 あなたも拭漆名人 「くらしを彩る小さなお重」

会期 10月6日(日)

講師 西端良雄氏(木地師)

会場 講義室

\*要事前申込み \*参加料が必要です

### ふれて感じる、うるしの温もり企画 うるし実演・うるし茶・うるし体験・輪島塗販売

会期 10月11日(金)～14日(祝・月)

共催 輪島沈金業組合、輪島蒔絵業組合

### 「いしかわ文化の日」特別無料開放

期日 10月20日(日)

### 輪島市いけばな協会花展

会期 11月2日(土)・3日(日・祝)

### 「輪島市民文化祭」協賛特別無料開放

期日 11月2日(土)～4日(月・振休)

### 第25回 飛翔する輪島の漆芸作家たち — 全国展入選作品 — ギャラリートーク

会期 11月17日(日) 13:30～

講師 浦出勝彦氏、坂本康則氏  
(両氏とも蒔絵作家・日本工芸会正会員)

会場 展示室1・2 \*要入館券

### ひょうたん遊び・作品展

会期 11月23日(土・祝)～30日(土) 正午

主催 石川県輪島漆芸美術館友の会

後援 石川県愛瓢会

### ひょうたんワークショップ

期日 11月24日(日) 午前10時～

\*予約無用 \*参加料無料(先着順・順次スタート)

## 2019年度 漆文化セミナーのごあんない

### 第2回 漆文化セミナー

「古神宝—春日大社を中心に—」

日時 9月7日(土) 13:30～

講師 高津綾乃(当館学芸員)

### 第3回 漆文化セミナー

「知られざる琉球漆器の世界」

日時 9月22日(日) 13:30～

講師 四柳嘉章(当館館長)

\*講演後、沖縄県立芸術大学准教授 山内昌也氏による漆塗りの三線演奏があります。

### 第4回 漆文化セミナー

「輪島の漆芸パネルについて」

日時 12月1日(日) 13:30～

講師 佐藤幸一氏(漆芸作家)

\*いずれも予約不要、受講無料。会場は講義室。

## オリジナルマスクングテープ を製作しました!

当館でしか手に入らない、オリジナルマスクングテープです!かわいらしい「わんじまピクニック」と蒔絵作家熊野宗石によるシックな「瑞鳥文」の2種。お買い求めは今がチャンスです!

わんじまピクニック(幅1.5cm)

450円



瑞鳥吉祥文蒔絵五段重(幅2.0cm)

600円